

## 平成27年度 みんなで学ぶ景観まちづくり市民教室

### 講演演題：盛岡町家の保存から景観まちづくりへ

講師：渡辺 敏男（わたなべ としお）氏（盛岡まち並み塾事務局長）

日時：平成27年11月16日（月） 18時00分から20時まで

場所：かごしま市民福祉プラザ 5階 中会議室



#### 【以下講演要旨】

こんばんは。お忙しい中、こんなに沢山集まって頂いて、本当に有り難い。今日、私がお話しするのは、まちづくりってというのは、地域で課題があって、それぞれ違う。ですから、本当に役に立つのかどうかと、いつもこうやってお話しする時に思うんですけども。

足掛け12年です。今、日本の中で有名な、特に歴史まちづくりみたいな関わりを持っている地域は30年とか40年やっているから、10年ちょっと（の活動）、というのは非常に若い。

東日本大震災（2011年（平成23年）3月11日）の4か月前、盛岡で開催した「街並みゼミ」では、全国で、特に重伝建（重要伝統的建造物群保存地区：文化庁系の制度）での、まちづくり団体が70団体位集まった。4年前で33回目ですから、最初にゼミを始めた人たち、例えば、川越（川越市川越伝統的建造物群保存地区）とか、倉敷（倉敷市倉敷川畔伝統的建造物群保存地区）とかの人たちは40年近くやってることになります。当初、60代の町家の所有者が中心になって活動を始め、12年目の今は70代になってます。

実は、当初から後継者の問題をどうしようかと。他所では40代前後で始め、最初の10年は良かったんだけど、その後尻つぼみになってしまって、地域の名前だけは有名だけど、もう活動はほとんどされていないという場所も結構あります。ですから、時代を繋げていくと言うまちづくりのテーマの中で、それを担う側も変わっていかなくちゃいけない、というのもあるようです。

#### I. 盛岡町家とその背景

僕らの場合、（鉾屋町界限での）都市計画道路（事業）がもう着々と工事が進み、あと10年で何もしなかったらアウト。という危機感の中で始めました。この10年の間に分かれ目となる画期的な時期、始めて丁度3年目に、初めて行政と一緒にやれるようになったんです。僕らは、始めた時に「道路の話はもうやめよう。」というのは、平成9年に地域で侃侃諤々として議論した結果、道路拡幅には皆さん賛成したんですね。ですから、直前のアンケートでも地域の中では65%位の人が早くやれ！というような状態だったものですから、まずは私たちが動く時に「道路の話はやめよう。ただし、道路沿いに建っている古い建物は一体どうするのか？その議論を最初にしよう。」そのためには自分たちもどういうものがあるのか、ということの研究しながらですね、やっぱり市は上位計画優先ですから、道路やりたい！10年でやるんだ！という流れでしたから、そういう中で市民的な支持を貰わないと、もう始めちゃった事業を途中でやめる、都市計画道路を外す、なんてことはとんでもなかったことで、東北では前例もなかった話だったものです。そういうような事情の中、丁度9年目に（今の道路を）残すということが実現しました。

僕らは勝手に「盛岡町家」と宣伝してるんですけども。盛岡って、やはり割と不幸な明治維新で、最後まで鉄砲撃ってたのは盛岡藩ですから、最初の明治7年までは占領地だったんですね。佐賀藩が秋田から来て、城を破却したのが明治7年で、その前に例えば外堀は病虫害駆除ということで、全部官軍の手で埋められるとかですね、白石転封、白石って福島なんですけど、所替えと70万両よこせという要求のある中ですね、白石に一回は行ったんですけど、一ヶ月でお殿様、帰ってきちゃったんですね。そうすると、ついていこうと思った人たち、特に武士を中心に、田

畑、屋敷全部売って準備してさあ行こうと思ったら、お殿様帰ってきちゃったんで行き場を失った。既にその段階で、土地はもうほとんど売り払ってるもんですから、武家屋敷が非常に残りにくい状況になりました。ただ、実際はもっと事情があって、武家屋敷が残りにくかったけれど、わずかに石川啄木のお蔭で、啄木新婚の家という名目で武家屋敷が一軒残った。啄木を口実に屋敷を残したという経過があります。もう一つ、明治17年に大火があり、これで重要な地域の9割が焼けてしまいます。ですから、それ以前の建物を探すと、運よく残った一軒か二軒位と思うんですけど、広範囲に燃えています。

実は、盛岡で活動する時に、町家に対する文化財系の評価というのがものすごい邪魔になったといえますか、日本では、戦前は町家っていうのはほとんど無視されていた。大きな理由は、藩政時代の物は遺構としての価値があるが、明治以降のものは価値がないというのが、文化財をやっている人たちの常識的な判断でした。私たちが活動した時は、文化財系の人たちはむしろ敵みたいなもので、足をひっぱるというのが実情でした。ですから、私たちの街で町家の文化財は一件もありません。文化庁に呼ばれて話ししてくれという時も、「無指定文化財のまちづくり」とわざわざ無指定とつけているんです。国交省系の支援を受け、3年前から景観計画で規制が入って、多分このままですね、維持されるんじゃないかなとは思ってはいるんですけど。とは言いながらですね、価値づけという意味ではやっぱり文化庁なんか巻き込んでやらなければいけない訳で。現実のまちづくりとそこが持っている歴史を、誰かに大きな声で価値づけをしてもらおうというのも重要なので、僕らも最初にやった時に、「行政とは、もうぶつからないようにしよう。」と。まちづくりてのは、行政とぶつかりながらやるってことは無謀なことで、特に東北は官の強い地域です。小さな町に行けば、官が地域を動かしている。そういう地域の中で行政と一緒にやることは非常に重要なことで、僕らとしても無理はしない。

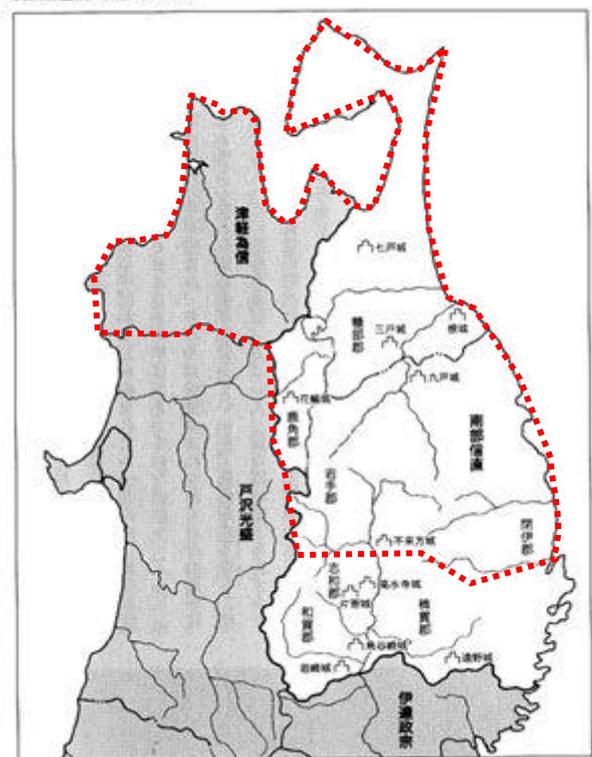
右図の点線の地域の範囲が、南部領で、中世末期、秀吉が奥州仕置きをした時に、津軽も独立して津軽藩になって、白い部分が近世の南部領と言われる。南部藩というのはどこにもなく、文化財の人たちには南部領盛岡藩に直せと言われるんですけど、これが明治7年、上の方は青森県にくっつけて、下の方は伊達の北部とくっつけたのが今の岩手県となります。実は、これが今だに地域の風景に大きな差がありまして、仙台藩の領域と盛岡藩の領域では建築自体が作る景観が随分違います。それはまた別な機会にお話ししたいと思います。

盛岡の城下町っていうのは新しいんですね。

小さな建屋があっただけの場所に、近世になって初めてまちづくりがされました。当初は金(きん)に恵まれ、平和にもなって人口も増加するんですけど、金がとれなくなる1700年位を境に人口も増えず、城下町も明治の終わりまでほぼ同じ大きさのままで来た街です。

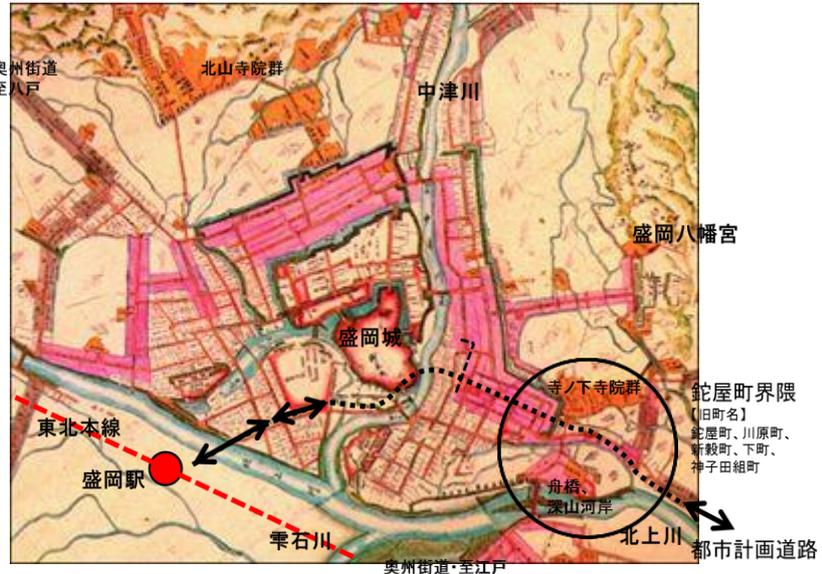
で、下図の実線の矢印とこれに繋がる点線、平成9年の、都市計画決定でなく、都市計画事業決定で、実線部分は着々と進んで、反対側の方も買収が始まり、着工してくる。

奥州仕置後の南部領



〔盛岡城下の街づくり〕(盛岡市中央公民館)より

市の計画では10年以内に、それを全部終わらせて、バイパスと盛岡駅が繋がるようにしよう、と。昔の絵図では、南から来る奥州街道の入り口にもあたり、宮古や大槌、釜石からも、丁度この鉈屋町を通過して城下町に入るといふ、そういう意味ではモノも人も行き交う、そういう場所です。多分、教科書などでは、北上川舟運、要するに川でモノが動く時代は、太平洋から200キロで、その川港はですね、左下が下流なんですけども、丁度我々が活動した図左下が川港で、あまりに浅瀬で、もうこれ以上上には行けないんで、中央にはお城があつて、それを取り囲むようにして町割りをされた町となります。我々は、この丸の地区の中で活動を始めたこととなります。



この真ん中は、実は戦災にもあつてません。しかし、戦後の商店街近代化とかで自分たちの手で壊したというようなことがありまして、駅が町外れに出来、そこに向かって街は動いていきますので、丁度、今は町外れみたいな形で残っています。じゃあそういう町家がいつくらいまで沢山あつたのかというと、実は明治に入って、近代建築が町家の中にぽつん、ぽつんと建っていくんですね。規模も背の高い二階建て位で、昭和の初め位まではそういう景観です。屋根はほとんど桎拭きか、母屋はほとんど瓦は乗りませんので、一般の建物はみんな板葺の屋根です。ですから先ほど申し上げた大火は屋根伝いの火災で、一ヶ所から火が出ると、火の粉が落ちたところが発火元になるんで、旧市街地が火災になると大火になる。要するに一ヶ所の出火元がいつのまにか10にも20にもなって、どんどん燃えていく。ということで、明治17年の大火では神社もお寺さんもほとんど燃えてしまう。

都市計画道路は昭和13年に作ってるんですけども、当時は13mですが、相当古い街並みで拡幅が問題になるということは戦前はほとんどなかったんですけど、それが戦後、13が15になって、17になって、いつのまにか27mへと道幅が変わったことから、色んな問題が出てくることになります。ご多分にもれず、盛岡も昭和45年の国体の準備のために街はがらりと変わっていきます。まさに官庁街で建て替えがば一つと起こってくる。それに比べて、この旧道、奥州街道ですが、ほとんど昔のままで町家はずらっとまだ残っています。ただし、その後、高度成長の中ですら、盛岡の中では20年間でマンションが160棟、仙台を除いた東北の他の県庁所在地では大体80棟から100棟位なんですけど、盛岡は新幹線が開通するのが早かったものですから、あっという間に、中心部にだ一つと建ちました。多くの武家屋敷の跡地は土地が広いですから、その時に随分無くなつてます。大きな町家ほど狙い撃ちを受けてマンションに変わっていったということもあります。

登録有形文化財は、盛岡にはたった2箇所しかない。これも県が所有しているものと、市が所有しているもので、実は民間は0という、非常にお粗末な文化財の状況になります。そういう中で、我々が始めたのが最初ではなく、実は国体の後反動で保存運動が起こります。割と街中に、地域の人たちにとって大事な景観が残っていたので、結構頑張ったんですね。伝統的建築物群保存地区制度が昭和50年なんですけど、ちょっと荷が重いということで、それまでの自然環境保全条例に歴史環境保全というのをくっつけて、建物と地区と樹木と庭園を市の条例で保全しようと動き出した。ただ、残念ながら、単体保存だったために、建物の背景みたいなものをきちっと押さえれば、有効なものだったんですけど、周辺がどんどん建て替わってポツンとしか残れない。で、

結果としては、残ったんだけど周りがどんどん変わってしまうということが起こりました。

で、指定の後ですね。ガイドラインでは法的根拠がない。あくまでもご相談。やだつて言われれば強制力がない形で、行政は景観形成をやっています。新築の建物にしか適用できないんで。このことと、その街が持っている資源との繋がりというのは、なかなかガイドラインに合わせて協力してもらうと言うことが難しく、実際は経済の圧力のほうが強かったということが言えます。そういう中で平成10年位から、近代建築の解体の危機が何点か出てきて、やっとうこういう風に若い人たち、私を含めて丁度2、30代から50代くらいのメンバー、これを壊したら我々世代の責任があるんじゃないかということで、何件か保存活動をして、何らかの形で残せた。

## Ⅱ. 街並み塾の発足と活動拠点

平成15年の暮れに地域の方から声がかかって、勉強会をやりたいということで、その勉強会がきっかけとなって、こういう「街並み塾」をつくるということで動き出したということです。皆さん、もう道路が出来ることに同意して10年も経ってますんで、それでも親から代々引き継いだ建物で、このまま道路出来て、黙ってて無くなっていいのかな？私たちの町家ってのは何か意味があるんですか？価値があるんですか？から始まってます。

で、当時、テレビで京町家なんてのを見ながらも、自分たちのものは町家ではない。ただ古くて、寒くて、暗くて、早く建替えなきゃいけない。そういう家に住んでるという認識だったんですね。子供たちも学校に行けば、新しい団地で友達が家を建てて、そこに遊びに行つて帰つてくると、暗くて、寒くて、子供が「お母さん、いつ建替えるの？」みたいな、そういう時代背景があつて新しい家、新しいということがすごく好まれた。古いというのが「古臭い」と。本来は、僕らなんかは古びると、古く美しくというのは「古びる」と書くんですけど、古臭いの方で思っていた。そういうことがあつて、改めて自分たちの家がどういう家なのかということ、皆さんと一緒に考えようということで。

その時にお話ししたのが、町家はある限られた範囲にどれだけの人が住むかということ、横、要するに間口割がそのまま人口を決めてしまう。当時、上に重ねていくという仕事は出来ませんから、横に繋がる集合住宅と考えて貰えばいいと思います。当時は、盛岡位ですと、町割りギリギリのところを街を作っていくんですね。ところが、人口が増え、最初は七間間口でしたんですけども、それが半分になったり、更に半分になったり、ということで、そういうふうな形で人口増殖を吸収せざるを得ないんですね。簡単に広げていけばいいという感覚ではないんですね。その代わり、地盤のいいところに町場というのは大体開かれますから、今回の東日本大震災の時に、旧町というのはほとんど被害がない。周辺の田んぼを埋め立てたとか、戦後開発されたとかはもう、天井が落ちたり、地盤崩壊したりとかいうことが起こっています。旧市街地ではほとんどなかったですけど、その代り、結果として間口が狭く奥行きが長いという、ウナギの寝床といわれる土地の形というのが、近世という時代の町人の背景です。

で、盛岡町家と、あえて盛岡とつけてるのはですね、実は盛岡も、皆さん多分社会科で「雁木」で習っていると思います。実は新潟から南の方は、雁木と呼んでる地域です。で、北東北では実はこれを「こみせ」と呼びます。ところが社会科では新潟の棚田辺りが載るんで、軒下のアーケードのことを間違ひなく皆さん「雁木」と呼び、青森、岩手、秋田では「こみせ」と呼びます。ただし、今通れるように残っているのは、たまたま一軒の間口が広いとか、限られた条件のあるところでしか繋がつて残っていないので、盛岡では割と早い時期に、それが通り抜けられないような閉じ方といいますか、いわゆる店先が変わっています。要するにその内側で戸締りして、基本的には開けとく場所だったんですね。

当時、どうやってこれを説明するか、実は京町家と盛岡の町家で平面図の基本形を作ってみると、うり二つなんですね。土間があつて、その土間に三つ部屋があつて、奥に行くと中庭があつ

て、その後ろに土蔵がある。これが大きくなると、2列になって部屋の取り方は横に延びるだけです。通土間を中心に部屋が張り付いていくという形が基本形になります。京都では真ん中に台所がくるんですね。今私たちが使っている台所とは意味が違ってまして、ここで賄いをする訳ではなくて、当時はこの路地の方に走りが付いたり、かまどが付いたり、井戸が来たりして、料理は別のところなんです。そのためにその上が煙出しの吹き抜けがつくんですね。ですから真ん中の部屋は、天井がありますし、二階もあります。で、何故台所なんだろうと京都の人に聞くとですね、やはり進取の人が多いので、客が来た時にお茶飲んだり食事したりする、民主的な使い方をしてきた、というような言い方をするんですけども。

盛岡の場合、真ん中がこういう吹き抜けで台所は奥にあります。もともとは座敷のところが台所の板間になって、奥の方にかまどや走り、要するに水洗い場ですね。そういうものがつく。で、真ん中は、吹き抜けで常居（じょうい）と呼びます。東北は結構、言葉が詰まるので、じょい、じょい、と呼んでるんですけども、要は仕事場なんです。ご主人がここで商いをする。で、今のように商品を並べて売るのでなく、座売りの時代、商品は言われたら持ってきて見せるというような商売の仕方、実際の商談は真ん中の部屋です。ですから、昼間は子供たちなんかこの部屋に入る訳にはいかない。お客さんを接待するとか、そういう場所なんで、地域の人たちもですね、主人を足蹴にしない、出世を妨げないようこういう造りになってるんだ、ということを皆さん代々聞いてきたと言ってます。これを見て、京都と違いがあることを判ってもらえば、自分たちの住んでいる町家というものが、似たようなものでありながら地域の中での進化の仕方が違うという意味ですね、大事にしてくださいというような話を当時しました。

その後、市との協働体制で悉皆調査した。町家が約320件ほどあり、土蔵が120棟位。平成18年ですか。割といいものは街の中にあるんですけども、中には表だけ洋風化して中はすっかり町家とかですね、僕らは「隠れ町家」と呼んで、もうほとんど普通の家だよな、けど中に入ったら、明治の中々いいものが残ってたり、ま、応急的に改修をしたら外観がこうなっちゃったという町家もあってですね。さっきの320件にはこういうのは入れてませんので、入れれば500件くらいは当時あったんだろうと思います。

それでもう一つ、この地域は既に街道筋に町家が張り付き、その北側には寺院群が八つのお寺さんがあって、すぐ側に北上川があると。で、盛岡の中で一番南で、湧水が豊富で共同井戸が二つ残っており、今でこそ酒屋が2軒あるんですけど、元は6軒位、酒蔵がある位水が出る場所でした。今はまだ共同井戸として、エリアの人たちがお金を出し合ってこれを維持管理している。普通、これらはいつのもにか行政が手を出すんですけども、

盛岡町家  
基本形  
平面図



地域の人たちの伝承ですね、代々、「絶対、どんなことがあっても行政に任せちゃ駄目だぞ」という代々の遺言があり、これは自分たちが維持管理しないと絶対に残らない。というようなことで、今だに地域の人たちがお金を出して維持しています。

道路が来るし、さてどうしようというのが悩ましい問題です。道路に反対って言ったところで、地域の中では早くしろっていう人が当時圧倒的に多かった訳です。まず初めに、鉾屋町と仲の良かった仙北町は既に拡張されて、地域の人たちがちりちりバラバラになって、景観も一変して、ただただ車にとって便利な広い道が出来たという結果を皆さん見てますので。自分たちの町もこうなるんだという危機感があったんですけど、それでも一回賛成したというか、声を出さなかったという点がありますので、道路の話はまず止めようと。

当時、まだ、西洋の石の文化とは600年でも千年でもそのまま残るから歴史的街並みがあるんだという誤解がありました。木造は災害には弱いけども、文化の工夫があるということで、まず一つは押さえたのは、型があるんですね。盛岡の場合は平入りですから、一つのパターンがある訳です。時代が変わって、当然技術も変わりますが、基本的な生活の形が変わってないですね。ですから僕らは藩政時代の遺構とかよりは、昭和も明治もその一つの型が継承されるから、間違いなくそれで価値があるんだ、というところで街並みの保存をしましょうと。

よく言うんですけど、伊勢神宮の20年遷宮というのは、一つの木造文化の典型だと僕は思うんですね。文化や技術を保存するために20年遷宮で作りを替える。これは極端ですけど。

あと重要なのは、どうやったら長く出来るか。もう10年でやるっていう目標があっても、街づくりなんかやったことのない人たちが始める訳ですから、どうしようかと。一番はやはり楽しくやるのが大事だよ、ということからですね。ジャズコンサートをやってみたり、それを楽しくやっちゃおうよということからですね。それと勉強会。子供たちってどこでも入り込んだりじゃうけど、大人は実は隣の人の家って見たことがないということがあります。で、自分たちの勉強会をやる。それからマスコミにもどんどん来てもらう、というようなことを最初のうちにやっています。ま、この時代は本当にマスコミもですね、何かやると記事にしてくれて、市民に、鉾屋町が変だよというようなことを流してくれました。

今、全体としては街並み塾では、こういう色んなプロジェクト活動をしてるんですけど。最初、行政と一緒に出来る前は各イベントを重点に行っています。中でも「旧暦の雛祭り」ってのは、当初は本当に数軒で始めたんですけども、今は50軒位参加するようになりました。4年目目で、2日間で3万人位集まるようになり、一番、盛岡の話題にしてくれたといいますか。都合のいいことに、お雛様を持って仕舞っていると娘がお嫁にいけなくなるよ、というもんですから、皆さん飾るんですね。ですから、今多くの商店街で、客寄せで雛祭りをやってますけど、僕らは町家の保存のために中を見てもらいたくて雛祭りを始めて、それが注目されるようになって、この日だけは、鉾屋町に来ると、普通に生活してるけど町家の中が見れるということで、色んな人が見に来てくれる。そういう積み上げがですね、市民の世論作りになっています。



で、他所から来て、素晴らしい！と一言いわれて、もううちは古くて5代目でとか、どんどんしゃべりだすんですね。そのことで、だんだん地域の人たちも、そうだよな、道路できたらなくなっちゃうんだよな、というところからですね、ぼつんぼつんと間口の大きな家が修理されてきました。

新蕎麦の会なんかも、盛岡の場合、例年だとちょうど11月初め位に新蕎麦が作れる時期なんですけど、今年はどうも豊作だったみたいで、珍しいことです。ここ10年そういうのはなかったみたいで。11月、下手すればぎりぎり間に合わないで言ってた朝、ぎりぎり間に合ったということがあるんですけど、去年の蕎麦使ったら新蕎麦って言わないですからね。

で、平成18年、市役所と一緒にやりたいと。盛岡ブランドを磨き上げたい。ブランド宣言という施策をこれからやるんで、その中で考えて貰えないかと。但し、一方で不幸だったのは、第1回目のコンサートを酒蔵でやってたんですけど、そこが倒産すると言うということが同時にあり、活動が変わっていくんです。その年に、国交省に、これは観光系だったんですけど、「都市観光の推進による地域づくり支援調査事業」として、この地域を磨き上げていくための調査と計画を作る、その申請はやっぱり行政がするのが一番いい訳で、盛岡街並み塾と盛岡市ということで採択されまして、この年色んなことをやってるんです。一年間、計画作りと併せて色んなことをやりました。あるハウスメーカーが「この辺りはすごくいい環境なんですよ。買いませんか。」って商売をやったんですね。ミニ分譲して普通の建売をやろうとした。周りの環境がそんなにいいんだったら、新しく建つ家は更に貢献してもらうものを作って貰わなきゃ詐欺じゃないかっていうことになって。これも実は市と一緒にあってだーっと動いて。当時の経営陣は立派でした。即座に、その通りだと。「うちの営業所は間違ってる」と本社から電話があり、「もう営業所に大至急行かせます。」ということで、市も入って協議しましょうということで、当時の会長さんなのかな、この方はこういう活動をすごく良く分かってくれたみたいで、そんなような悪戦苦闘もあったりもして。

で、私たちがそろそろ拠点がないと限界だよな、という時期でもあり、町家を見せようとしても見せられないんですね。それから我々の組織の形も変わっていかなくちゃ駄目だと。一団体の活動ってのはやっぱり良くない、色んな団体が色んな目的で、ただし向ってる方向だけはやっぱり一緒という形ですね、色んな団体がそれぞれの事情の中で、という形に変えていこうと。その代り、一つ一つの活動を継続できるように、きちっと事務局を応援していく、というような活動に振り替えよう、ということの結果が、「若者プロジェクト」。もう最近はすごいエネルギーで、彼ら年2回、2日間で毎回、100店舗位が集まって、雛祭りでは平均年齢が60代超えるんですけど、若い者たちがやると平均年齢が25歳位になってしまう。

我々も**活動拠点**を持つということは、人が訪ねてくる訳ですから誰か居て、北国では暖房をしなきゃいけない。そのためには300~400万位を持っていないと駄目だということになります。ですから相当、議論があったんですけど、ただ大事だったのは、改修前はこういうぼろぼろのやつが直るの？こんなにお金使っていいのかよ、という話がある中で、当然私はプロですから、直る！その時ノーと言えば駐車場になってるんですね。で、持ち主も「勝手に直すのはいいよ」、じゃあ15年とか20年位は貸してもらわないと、そういうお願いはした上でですね、大体900万、市役所の方で3分の1、我々の会で600万を集めて、改修をして拠点にしたんです。で、それからがまた格闘なんですけども。ある意味では、民間ではこういうものは持たない方がいいですね。本当にお金がかかります。実は市とは、**観光案内所**として共同管理してきちっと支援していく。じゃ、折半、ということで、維持費半分、人件費も半分出すということで、最初スタートしています。それが今では、イベント以外でもですね、「ホールでやるよりも50人位のコンサートが非常にやり



やすい、目の前のお客さんの反応を見れますし、」ということで、プロのコンサートをこの場所で年間4回くらい、前売りはエージェンシーが入って大体1週間位で完売と。ほかには会議とか、お寺さんが近いんで法事という需要があるんですね。親族が集まる場所が、お寺さんに前はあったんですけど、今、葬祭会館とかが出来てお寺さんもそういう準備ができないということで、仕出しの手配とかもします。毎月何件か法事なんかも来ています。それから伝統芸能で座敷踊りつてのを定期的にしたたり、春と秋に自分たちの合同のバザールみたいに町家を活用してやっています。ま、仕切りはとれば大きく使えて、そういう意味では使いやすい。

その後、懲りもせず2軒目を、これも空家で、今度は借りた人たちのお金で維持できることを考えようということで、住まいとして色んなことが出来るんじゃないかと。この界限、昔はたしか120軒位のお店が今や5軒位しかないんですね。どんどん住宅化しちゃっている。ということで、そういう空家に、暮らしというテーマで、手っ取り早くはちょうど借家法が変わった時期で、1日賃貸借が出来るようになったんですね。ウィークリーマンションとかは法的根拠がなかったんですね。今、ちゃんと賃貸借契約さえすれば出来るので、じゃあそういうことを活動にしていこうと。今は3軒位で、最大15名は泊まれるようになってるんです。

もう一つはシェアハウスにしてもらえないか。ちょうど真ん中（常居）を共有部分にして、1階、2階で4つ部屋が出来て、シェアハウスで安く貸してくれないかと。1人3万ずつで3人入れれば9万円、大家さんに4万5千円払って、あとの4万5千円は投資分、丁度10年改修で、10年経ったらちょうどいい塩梅と。でもこういうのって一端できちゃうと「入る所はありませんか？」ってまたくるんですね。ところが中々そうはいかないんですね。というのは、またお金を用意しないと、修理費を考えていくと中々面倒なんで。でも、そういうのもあると分かって来てるんで、そういうことも含めて進めていきたい。



### Ⅲ. 市との協働のはじまり

じゃあ市はどういうことをやってきたのか。特産品、地域の宝物、地域の恵み。ま、似たようなものですね。この3本柱で地域ブランドってのがあるんですけど、ここに「まちなみ景観づくり」ってのを入れて貰った結果ですね、市も鉾屋町の活動を一緒にやろうということに繋がっていく訳です。で、そのお蔭で国交省の採択の中でやって、結果としてこれを「盛岡町家等街並み保存地区計画」の名目です、条例に従え！ではなく市長決裁という形で扱う。で、その重点地区がこの鉾屋町なんだという位置づけをして、その延長上に実は国の補助事業を入れるということもできました。当然、道路は昔のままです。多分27m道路をやめると100億位得するんですね。市が土地を買って、建物を補償して、道路作ってとなればですね。丁度私たちが止めてほしいところを止めるだけで100億位、それはそれとして、現道のままで整備してほしいとか、こういう大事な施設は繋げていくんだとか、色々地域から出た問題点を含めてですね、交通アクセスが悪いとか、盛岡も（路面）電車があるんですけど、これは中心部しか走っていないんで、これとリンクする、奥に行くミニ電停みたいなものを作ってほしいとかですね、その中で骨組みしていったんですけども。その時にこの街なみ環境整備事業、これ実は一見、都市局がやりそうな施策なんですけど、住宅局の施策です。公共施設整備も2分の1補助なんで市にとっても得なんです。

道路も無電柱化も優先的にやれて、地区環境も2分の1補助する。国が我々の修理費の分につ

いてもお金を出してくれる。最近騒がれている空家対策事業の中で除却も出来る。更に受け皿をちゃんと作りなさいと言うことで、「活用推進協議会」を、市（観光と景観）と作って。あとは地域の人たちの活動費も、毎年 60 万だけ地域で用意して、80 万はそのまんま補助します。ということで、実はこの中で色んな活動ができます。

それで、21 年度の暮れからですね、**修理事業**を始めています。左側は古い着工前、右側は改修後ということになります。



（明治期町家：400 年以上の歴史を持つ鍛冶屋。道路側は吹抜けの鍛冶場、2 階床、外壁は新建材で改造。）

よく皆さん、「それにしたって 2 分の 1 は要るのによく協力してくれますね！」と言うんですけど。このほかに「ダイレクトに見えないようにこういう格子入れただけでも補助出していいじゃないか」ということで、出てきた見積が随分高いなと思ったんですけど、2, 30 万の工事費に半分の補助ですから、こういうのも貢献するという意味では出していいんじゃないかと。

で、実は皆さん外観だけじゃなくて、もう 30 年位我慢して生活している分、設備を全部やり直さなきゃいけません。それから盛岡辺りは断熱をちゃんとしないと冬場大変なんですよ。断熱しないで前のような生活をしようとする、5 万も 6 万も灯油代がかかるということで、断熱をちゃんとやると。こういう町家でオール電化したんですね。全部で光熱費が 2 万円位です。いかに断熱が大事かということなんです。これが結構大変で、雰囲気を変えないで断熱をどこにいれるんだ、という難しい判断があるんですけども。ただ、修理で大事なものは引き算はしない。こっちの都合で柱をとったりは極力しない。要するに「引き算はしないけど、活用のための足し算はする。」足し算はあとで元に戻すことが出来るけど引き算だけはしない。それはもう、こういう古い建物の修理の大原則ですね。自分が迷っちゃうような古い部分は、後で検証できるようにちゃんと残しておく。足し算で修理をすることが大事です。

それから、修理した建物の間にですね、昭和 40 年代の建物が残っちゃう。運よく、「外壁が傷んできたけど、これ剥がして直しますか？」と相談が来たんで、これ ALC 板を取れば内壁もとる大改修になってしまうので、「いやいや、あんたの外壁は木造 OK だよ、今法律が変わったから、木造でももう一回これを、外壁をちゃんと支えて押さえる、新しい壁にもたせることはできないけど、これ以上の崩壊は防ぐだけの価値はあるんで、やりませんか。」その時、200 万位の工事費の見積もりを既に持ってたので、「じゃあ私の方でそれで収まるようにやるし、補助金も入るようにして、300 万かかるけど、150 万の補助が入りますから、あんたの持ち出しは 150 万ですむよ。」というようなことをしました。（街並みで）素材を揃える大切さ、といいますかね、そういうのも景観をやっていく時に大事な要素だと思います。

それから、この人は単に電動シャッターが壊れちゃったというのをきっかけにですね、シャッターを直すだけでも 20 万位かかるんで、「何とかもう、20 万用意できませんか、40 万で考えれば補助金入れて 80 万使えます。で、表を変えませんか？」という提案して改修をしました。案外、

そういうことなんです。皆さん、割と30年や20年経って修理しなければいけない時期とぶつかってる。地域活動しててそういう情報が入ってくるんで、僕らも改修相談するのは、窓口だけじゃなくて、会員全体です。情報が集まるようにしています。申請のお手伝いも市との協議もするし。最終的な審査も、実は我々の主要メンバーの中で、市と審査会をやるというような形をとってますんで、案外こういうことが出来ます。中には自主的改修をしてくれますし、こうやって直してくれると、10年経つと繋がってくるということがあります。

#### IV. 修景プロジェクト

子供たちにも何とか手伝って貰おうと言うんで、こういうブロック塀に板を張るプロジェクト、子供を呼ぶとお母さんも来てくれますんで、結構な人数でやるんですけど、そんなにお金がかかる訳じゃないんです。板は市役所に頼んで、森林組合から分けて貰ったりとかですね、ま、最後の仕上げは大工さんがやらなきゃいけないんで、その費用は若干用意しなきゃいけませんけども。ただ、大事なのは子供たちと一緒にやったということで、終わった後ちゃんと名前を残してあげる。



それから、市の施策で「ハンギング・バスケット」を年間3,000万円位かけて、春から秋までやるんですけども、私たちの町でもやってくれと言われても採算があわないんです。で、我々が考えたのが「朝顔プロジェクト」です。苗木を、ちょっと体の不自由な方の訓練所で育てていたんで、それを施設にも収入になるよう買い取って、6月に置いて、7月にはもう花が咲き出すんで、盛岡寒いんですけど、9月ぐらいまでは朝顔もちますので、このようなプロジェクトをしたりですね。



案内看板がないっていうんで、それもお金かけないようにしながらやって来ています。

#### V. 終わりに

このやり方がどこの地域でもうまくいくかというと、やはり地域の事情があります。ただ、大事なのは積極的に地域の人たちが参加する、行政だけが先に行ってもうまくいかないんです。今、こうやって僕らに「支援をお願いします」と来るのは、地域の団体から来ればいいんですけど、行政から来たりもして、どうしよう、と。その時にいつも言うのは、「行政が先に走ったら駄目ですよ。仕掛けは一杯しとってください。でも、やっぱりこれは、最終的には10年、20年やろうとすると、今の行政の体制ですと、大体3年か4年で変わっていかなくちゃいけないような仕組みになってるから、継続的な支援というのはやっぱりできない。制度を作れば制度上は支援出来るけど、まちづくりを活かそうと、その地域らしいまちづくりをしようとする、やっぱり地域の人たちが繰り返し、あきらめないでやるという仕組みを作っていくと、うまくいかない。」ということで、今、僕らも12年。これからあと10年を頑張ろうと。

ただし、その間に、ちゃんと次の10年の世代を育てていこうということで活動しています。

是非、鹿児島でもこういう景観まちづくりが始まっているようにお聞きはしてますけども、今のことも大事ですけども、10年や20年、それをずーっと維持していくだけでも大変ですし、それを良くしていこうなんて思えばもっと大変です。でもそれをやっていく組織づくりみたいな、チームづくりをやって成果を作っていく。10年やってみると変わりますよ。やっぱり、10年間の積み上げってのは目に見える形でね。是非そういう息の長い自分の世代で終わらない、そういう活動をして頂きたいと思います。ちょっとオーバーしましたけど、ここで一回終わりにします。

## VI. 質疑応答

### (質問1)

先人たちが育んできた地域の歴史的環境、建築群を守り育てて、地域に根差した歴史的まちづくり、それを継承し、次代に繋げていくためには、教育が大事ですが、どのように今の活動に活かしていくご予定か。また、1日貸借での防火対策、街の安全への対策をお尋ねしたい。

### ⇒【渡辺氏】

小学校の生涯学習時に「地域のまちづくり」を私たちがしゃべらせてもらってます。雛祭りとかでは、買い物ゲームのように子供たちにもお店を出してもらう。そのために自分たちで、10円で売っていいものなどを放課後作ってもらって、並べて、一所になってやってもらうというような活動もしてます。先ほどの「若者プロジェクト」の中心メンバーが20人、社会人がほとんどで、32、3が上限ですかね。当然、岩手大とか県立大の学生なんかは、勤めてから活動に入って来ますんで、多分、突然私が倒れたりすれば、彼らが確実にやってくれるだろうということ。

その代り、相当、自由に、好きなようにさせてます。時々、一緒に飲み会やったりして情報交換はするんですけども。ま、時々多少の修正はしながらも、基本は自分たちの考えで、地域の人たちにも迷惑かけないでやるというようなことをきっちり守って。というのは、先頭立って、除雪とか井戸の掃除も交代で、月に2回やってくれてますし、次の担い手はその中から出てくるんじゃないかなと思って。ということで、次の10年はあんまり心配していません。

一日賃貸者の話は、町家ってのは店舗付住宅で、住居部分があってもいい訳で。心配は当然あるんで、火災報知器や消火器も必要な分、ちゃんと置いて、最初の説明はキチンとして、賃貸借契約書というものにハンコをついてもらう。いるんですね、安いから泊まる。夜中にクレーム、で、それ以来は、趣旨を説明をし、安全だと、どこに消火器があるとか。僕らは部屋貸してるだけという認識なんで、当然食事も出さないし、まあ、それが万全かどうかというのは、あれなんですけども。ま、夜間は隣近所の人たちには何かあったら必ず連絡してくれるような体制にはしてやっています。特に火災だけは気をつけて、泊まる方には、一切火気厳禁ということでお願いして、幸い事故は起きていません。

どうも見てると、核家族の核分裂と呼んでたんですけど、今、一家4人が3か所で住んでるような時代の中で、この鉾屋町に来ると何か自分が楽になるみたいな。新しい友人関係がすぐ出来るんですね。それが楽しくて、友達が友達を誘って、ついこの間の食事会には30人位いましたからね。もう結婚したのも4組位出てますんでね、何かこう出会いの場になってるのかもしれないですよ。それは拠点を自由に使ってもらって、集まる場があるということも、多分重要な意味があるんだと思います。

### (質問2)

木造は補修、改修とかが難しいところがあって。先ほどのリフォーム事例で、木材を貼り付けて、それが煉瓦タイルのような素材、グリップ状の非常にユニークなものに見えた。

⇒【渡辺氏】

これは、通常の羽目板に、簾子（ささらご）下見板張り（注：板張り壁工法。表面から板を張るのではなく、簾子の下部を噛み合わせる様に加工し、板を裏打ちして枠組状態のものを壁として貼り付けたパネル工法形式）という張り方です。横に板を張って、これで押さえてやる張り方をするとこういうふうになります。それに格子を組み合わせたりにしてますんで。使っているデザインはわりと伝統的な、歴史を持った使い方を組み合わせてます。こうやっても、防火サイディングの値段に比べれば安い。但し、今の若い大工さんはこういう仕事の機会がないから、頼むとすごい高い見積してくる。やらせてみて初めて「あ、大したことないんですね」ということになる訳ですね。木材ってのはやっぱり強いですから。塗装が取れて段々黒くなってからも強いです。木は自分で黒くなることで自分を保護しようとしちゃいますんで、50年位は簡単に持つ。平成17年法改正で、外壁に木材張ることが条件付きでよくなったんですね。古い街並み保存をしていると、板が腐れてくるんですよ。それを色んなところで実験して、例えば木だって、家本体に火が移るのを遅らせる効果があるってのははっきりしている。岩手でも昭和27年施行から、防火地域では完全に木が使えなくなりましたが、その法改正で、防火地域でも板が張れるようになってます。ただし、貼る順序があります。構成はありますけどやれるという、やっとそういう時代がきましたんで。是非、簡単に木材で出来ますんで。

※渡辺敏男様は2017年1月17日に逝去なさいました。故人のご功績を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。